様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００３９２

研究課題名（和文）観念連合論の身体・物理的展開---近代文学批評理論の学際的再評価

研究課題名（英文）Material-Physical Phases of Associationism: An Interdesciplinary Re-Interpretation of a Post-Enlightenment Literary Theory

研究代表者
小口　一郎（Koguchi, Ichiro）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・教授

研究者番号：７０２０５３６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　観念連合論は、古典古代から現代まで西欧の中心をなした心理理論である。精神の機能を、観念の連想関係に求めるこの理論は、イギリス18世紀には身体的・物理的な理論展開を見た。
本研究は、18世紀の複数の思想家が、連想的な心理過程を機械論と有機体論の両面から、人間の神経系統の構造に位置付けたことを論証し、さらに身体を媒介に、精神の活動が自然環境に開かれたものとして考えられていく様相を、アメリカのアウトドア文化の中に追った。
現在、身体・環境的観念連合の到達点として、William Wordsworthの詩を取り上げ、邦訳と注釈の執筆を進め、研究の最終的達成を目指している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
19世紀以降、人文学、科学、医学等の学術分野は独立して研究されるようになり、得られる知見も他分野とは直接関係ないと考えられている。しかしそれ以前、科学と人文学は西欧においても一体として追求されていた。諸分野が截然と分かれ、研究対象や方法が独立して定義されている現在の観点からは、こうした過去の文化状況を正確に把握することは困難であり、優れた知見を学ぶことも難しくなっている。
観念連合論は、人間存在のあり方を科学と人文学が一体となって追求してきた分野であり、これを文化史的に分析することで、本研究は西欧文化の根源的学際性を明らかにし、心理、身体、環境までにわたる過去の知見の評価を可能にした。

研究成果の概要（英文）：　Associationism is a central psychological doctrine through the history of Western culture. It defines the functioning of the human psyche as dynamic associational processes between ideas in the mind. As this research project has demonstrated, the theory was redefined in eighteenth-century Britain as a process occurring in the human nervous system. This physiological development re-established human psychology as an open system linked to the natural environment via its physical dimensions. Environmental thinkers in the US, in particular, contributed to this theoretical extension.
Currently the researcher in charge of this project is working on a new translation of William Wordsworth's autobiographical work, The Prelude. Through fresh translation and detailed annotation, the project is aiming at shedding light on how the poet combined the theory's psychological and physiological aspects with the organic working of the external natural environment.

研究分野：イギリス文学・文化

キーワード：観念連合論　心理　身体　環境　連想　生命体論　機械論　創造性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は「観念連合論」の物質性・身体性の意義を歴史的に検証し、かつ現代の環境批評論の観点に結びつけることで、再評価を試みるものである。

観念連合論は西欧における主要な心理学理論であった。注目すべきことは、この理論は古典古代から、現代でいう「学際」の場であったことだ。とりわけ啓蒙期以降のイギリスにおいては、心理理論の枠組みが身体・物質的に再解釈され、当時の生物学や環境論の展開と軌を一にしながら、観念の連想関係が生物進化や環境改善の重要な要素となるという包括的な世界観に達したと考えられる。

特に 19 世紀後半からの学術は専門性を強め、人文学、科学、工学、医学等の分野は、研究対象や方法を含め、それぞれが一つの専門分野として厳密に定義されるようになった。こうした傾向は、正確な知見の獲得には優れた成果を挙げるたが、かつてまだ専門分野が截然と分かれておらず、混然一体となって学術が追究されていた時代の学術思想や成果を正しく理解することを難しくしてしまっている。また、現代において示唆や価値のある、かつての時代の知見を発見することも困難になっている。

本研究はこうした観点から、根源的学際性を有する「観念連語論」を文化史的に見直し、心理学理論を生理、物理、そして環境にまで開くことで、かつての西欧文化の知見の十全な理解を可能にし、その意義を、エコクリティシズム等の現代の新しい知見にまで応用することを目指した。

２．研究の目的

「観念連合論」は西欧の主要な心理学理論であり、英米では、主に文学批評に援用されるなかで、その思想・文化に決定的な重要性をもつことになった。

「背景」にも述べたように、本研究は観念連合論の中に歴史的に内在する学際性、特にその身体性・物理性に注目することによって、この理論が主に18，19世紀のイギリスにおいて精神・身体・環境を統合する思想的枠組み・文化実践であったことを論証し、その歴史的意義の再評価を試みる。

イギリスにおいて観念連合論は、啓蒙期以降、観念の連想の場を中枢神経などの器質的次元に置く考え方が優勢となる。そして生命体論や環境論の展開と並行し、連想の複合的な集積による精神の発展が身体や生理に変容をもたらし、生物進化を支える原理となることを論証する。さらに心理過程が神経系など身体を媒介とし、人間や生命体を取り巻く環境と関係を結ぶこと、そしてそうした相互関係のなかでエコロジカルな意義をもつという包括的な世界観にまで達していたことを探りたい。

観念連合論の歴史的展開をあとづけながら、近年のエコクリティシズムの知見等も援用し、実証と理論的考察の両面でこの心理学理論・文学批評理論を再評価する。

３．研究の方法

17 世紀から 19 世紀初期までの文献研究を基本とする。哲学思想家、医者、文学者、美学者等、さまざまな著述家による文書を実証的に考究する。主な文書はイギリスのものとなるが、アウトドア系の思想についてはアメリカ 19 世紀の文書を視野に収め、Henry David Thoreau や George Marsh の野外活動記録や気候・環境論を考察の対象とする。また、気候論を中心としたエコシス

テムについての初期近代の考察については、大陸ヨーロッパのリンネとビュホンのテクストも研究対象に含める。

文化理論の面では、現代のエコクリティシズム（環境文化研究）をレビューし、19 世紀までの観念連合論の展開との親和性を考察する。これによりこれまで見過ごされてきた近代心理学の環境論的展開を、現代批評の観点から理解するとともに、現代思想の先駆けがすでに近代の心理･生理理論にあったことを論証し､エコクリティシズムを歴史的に位置付ける試みにも繋がる。

４．研究成果

イギリスの近代思想には、伝統的な心理学理論である観念連合論の物理・身体的側面を展開した系譜がある。これは17世紀の哲学者Thomas Hobbesから、18世紀の神経学者David Hartley、そして医学者・文学者のMark Akenside等を中心とした流れであり、哲学言説、心理・神経理論、医学言説、哲学詩などが主な媒体となった。さらに、18世紀後半から19世紀にかけてこの思想的系譜は、Joseph Priestleyによるのハートリー理論の編集と解釈を経て、生物学者・医学者・詩人のErasmus Darwinによる哲学詩を通した、心理、身体、自然界を包摂する包括的理論の形成に受け継がれた。この系譜は、ロマン主義詩人William Wordsworthによる身体経験の現象学的解釈と、その解釈に基づいた詩の創作、そして詩学や文学論に流れ込んでいる。

ワーズワスの『湖水地方ガイドブック』は、この系譜を受けたテクストであり、この中で彼の自然現象の知覚と環境思想は、観念連合論由来の物理・身体・心理を包摂する理論的な枠組みの影響下で産み出されたものであった。またこのガイドブックには、18世紀由来の思想を19世紀の観点から超克しようとしている面がある。それは物理的存在としての人間と、身体において実体化される精神が、「自然」との協働によって「環境」を創造し、「自然」と「人間」という二項対立を乗り越えていく思想的営為である。現代のエコクリティカルな知見に照らして言えば、この新しい展開は、21世紀の地質学・気象学が探究しつつある「人新世」の概念を19世紀中期において先取りした側面がある。

ワーズワスが考えた包摂的心理のあり方は、大西洋を渡ってアメリカ東海岸のHenry David Thoreauの革新的な環境意識を産み出す一要素となった。ソローは*Walden*や*Main Woods*等の主要著作において、人間が、文明社会の周縁部にあるいわゆる自然世界と物理・身体レベルでの交流を行うこと、そしてこの交流が身体・精神・感受性を包摂した「人間」を形成することを示唆していた。ソローの半ば直観的に見えるこの洞察は、イギリスにおける観念連合論の生理・身体的展開に、体験的な肉付けをしたものであると言えるだろう。また、大陸ヨーロッパのLinnaeusやComte de Buffonが考察した、水、空気、ネルギーの循環系としての自然システムに、人間の身体が参与しているという主張と一致する考え方であった。

また、イギリスでは、ワーズワスとは異なる立場からWilliam Hazlittが、知覚の「強度」に人間精神の創造性を位置付け、観念連合の非形而上的展開を美術批評において展開した。物質的実在と認識を、抽象と観念のレベルで統合することを志向したロマン主義時代にあって、ハズリットは絵画の具象性を評価する批評的枠組みの構築に腐心した。彼は、経験論哲学における抽象と具象の階層関係を逆転させ、芸術的想像力の到達点を鮮明かつ精密な具象的表象に置いた。ハズリットが用いた観念連合的な用語法によれば、そうした芸術的達成は、視覚表象、言語表現、観念を結びつける「果てしなく伸びる人間存在の連鎖」であり、連鎖が複合する「網目」「ネットワーク」であった。

ハズリットの美学は、Walter Paterにより、ヴィクトリア朝以降の芸術批評における具象的描写の再評価に受け継がれるとともに、ペイターの思想を媒介した思想家George Mooreの働きに

より19世紀後期における印象派芸術の成立の背景ともなっている。初期近代から続く、イギリス系観念連合論の系譜は、20世紀のSigmund Freudの自由連想法に受け継がれたことはよく知られている。しかし人間心理を超えた、より包括的なその思想的展開は現代絵画の入口の芸術運動にもその痕跡を残しているのだ。

すでに述べてように、観念連合論が物質的に再定義され、環境意識にまで影響を与えた過程は、エコクリティシズムの人新世理論の先取り的な側面もある。2020年、現代を代表するエコクリティックであるSeth Renoは、人新世の思想・文化的系譜を18世紀から19世紀までの1世紀半にわたるイギリス文学のなかに跡づけた研究を発表した。彼が明らかにしたイギリス近代文学の人新世意識は、包摂的観念連合論の観点から再度解釈することが可能であろう。

現在、本研究の締めくくりとして観念連合論の広範な展開を、具体的な作品テクストの翻訳と注解において論じる作業を行っている。人間心理と自然界との情動的協働に、水、風、食品、物理的衝撃が役割を果たしていることを、ワーズワスの自伝詩*The Prelude*を選定し、検討している。コロナ禍のため、この仕事の進展は大幅に遅れたが、数年内にその成果は発表できる予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Ichiro Koguchi	４．巻 64
２．論文標題 Japan Shelley Studies Center (ed.), The Age of Frankenstein: Bicentenary Essays	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Studies in English Literature, English Number	６．最初と最後の頁 161-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小口一郎	４．巻 第94回大会
２．論文標題 「人間の時代」の Wordsworth---風景と造園	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本英文学会Proceedings	６．最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小口一郎	４．巻 46
２．論文標題 Hazlittと『抽象』---ロマン主義の詩学から19 世紀視覚芸術へ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	６．最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小口一郎	４．巻 46
２．論文標題 「自然」から「環境」へ--ワーズワスのエコロジー的展開--	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	６．最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ichiro Koguchi	4．巻 42
2．論文標題 大河内昌 著 『美学イデオロギー― 商業社会における想像力』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	6．最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ichiro Koguchi	4．巻 56
2．論文標題 Seth T. Reno: Early Anthropocene Literature in Britain, 1750―1884	5．発行年 2023年
3．雑誌名 IVY	6．最初と最後の頁 147-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 小口一郎
2．発表標題 「人間の時代」の Wordsworth---風景と造園
3．学会等名 日本英文学会第94回全国大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 小口一郎
2．発表標題 詩Hazlittと『抽象』---ロマン主義の詩学から19 世紀視覚芸術へ
3．学会等名 イギリス・ロマン派学会第47回全国大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 小口一郎
２．発表標題 Wordsworth: “Ode: Intimations of Immortality” -- オードというメッセージ --
３．学会等名 第38回（2019年度）イギリス・ロマン派講座（イギリス・ロマン派学会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ichiro KOGUCHI
２．発表標題 Wordsworth in the Anthropocene: Nature and Human Practice in _A Guide to the Lakes_
３．学会等名 International Wordsworth Summer Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小口一郎
２．発表標題 「自然」から「環境」へ --ワーズワスのエコロジー的展開
３．学会等名 日本ソロー学会 2019年度全国大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ichiro KOGUCHI
２．発表標題 Wordsworth in the Anthropocene: Nature and Human Practice in A Guide to the Lakes
３．学会等名 Kansai Coleridge Society 184th meeting
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 吉川 朗子、川津 雅江	4．発行年 2019年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 320
3．書名 トランスアトランティック・エコロジー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関